# 大地踏み

致道博物館　館長　酒井　忠久

元和8（1622）年酒井家三代忠勝が庄内に入部して400年という節目の年を迎え、酒井家庄内入部400年記念事業実行委員会が令和3年に発足した。プレ事業、本番の令和4年には記念式典のオープニングを飾ったのは伝統の黒川能のおめでたい演目「高砂」の上演ではじまり、ご来賓のお祝辞をいただき、鹿児島市、東京江戸川区、墨田区・名寄市、曽於市、木古内町、新島村等の交流都市の代表のみな様はじめ、ゆかりの皆様千名が集われた。そして本郷和人先生の講演、徳川宗家家広氏そして四天王の末裔榊原政信・本多大将・井伊直岳各氏に私が加わって記念座談会を催し式典は盛会裡に修了した。

本郷和人氏、徳川家広ご宗家と四天王末裔
記念座談会　　鶴岡市提供

両年にわたって、数々の公演や歴史シンポジューム、歴史講座、庄内一円の博物館等施設では特別展を開催、いろいろな記念事業をおこなった。入部400年記念事業実行委員会始め庄内一円の皆様の御尽力ご協力に有難く厚く感謝を申し上げる。

「400年から学ぶ庄内、みんなでつなごう将来」のもと、庄内の歴史を知り、庄内の精神・価値を学び考え、持続可能な未来を創造するという基本方針によりおこなわれた。令和5年にはネクストとして、新たな企画や、またNHK大河ドラマ「どうする家康」がはじまり、徳川四天王初代酒井忠次の活躍が楽しみである。

黒川能は500年以上も前から鶴岡市の黒川地区で鎮守春日神社の年4回開催される例祭で神に捧げる神事能として伝え受け継がれ、今の五流にも属さずに独自の展開をしてきた。室町時代観阿弥・世阿弥により大成された能は戦国大名に愛好され、江戸時代には幕府の式楽として認められた。黒川能は、中世に庄内を領していた武藤家の六つ目結紋が伝えられ、その寄進庇護を受けた。その後上杉家、最上家を経て庄内藩酒井家となって、江戸時代には十回の上覧能が鶴ヶ岡城内で行われた。黒川能演能は藩主代替わりの恒例行事となり、そして度々春日神社には家臣を代参に遣わした。こうして黒川能と長年にわたって親密な関係が築かれ酒井家は能装束等を寄進するなど援助奨励した。今も王祇祭では酒井家にそれぞれ当屋から招待状をいただいたり、また五月の例祭には春日神社にお参りする。現在、春日神社の氏子は約240戸、上座と下座の両座にわかれ、能役者

は、囃子方含めて子どもから長老まで約150人、能面250点、能装束500点上、演目数は能500番以上、狂言50番を伝えてきた。昭和51年（1976）国の重要無形民俗文化財に指定された。冬の旧正月2月1日に行われる王祇祭は特に重要なお祭りである。私はその頃は毎年行っていたので王祇祭がこないと正月を迎えた気がしなかった。父酒井忠明は平成15年1月宮中歌会始で召人をつとめたが、その5年前、83歳の父と私たち夫婦そして東京からの友人達とともに王祇祭の当屋へ行く前に春日神社難波玉記宮司宅にお祝いに行ったときのことである。いれかわり、たちかわり祭りの客がきて、お膳とお酒が振る舞われていた。私たちも加わって20名くらいの賑やかな小宴となった。宮司がやおら大きな襖はずして宴席の中央におき、「殿はん、書いて」と父に願った。父はやや考え、筆をとって襖に乗って墨書した。「伝え古き黒川能のこの夕べ雪しんしんとふりいでにけり」

その歌は黒川能をよく表していると、王祇祭では難波家の家人となる歌人馬場あき子さん、私たちがご案内したエッセイスト下重暁子・大野弘義・轡田隆史・栗田亘・佐田智子さん達に大好評だった。今ではそのまま春日神社園庭に歌碑（下写真）となっている。

2月1日の早朝春日神社から王祇様を両座の当屋にむかえ、夕刻から神事能が始まる。王祇祭は稚児が務める「大地踏」に続いて、上座は黒川能特有の所仏則の翁、下座は通常の公儀翁と呼ぶ「式三番」と演じられていく。

「大地踏」下座・春日神社旧例祭・王祇祭・王祇会館提供

大地踏みは、「7つまでは神のうち」といわれ、神の子となりしっかり大地を踏み固める所作と新年を寿ぐ詞章を唱え喜びをうたい、祈る。

「是へあたりくるる年の神事をもって敬って申すなり。日月のひかり新たにして東に拝見つこうまつり南に松高うそみえ、西にぐんせい海満々　北に頂上鳥の海」とむずかしい言葉をうたい、扇をもち、刀をさして四角や星のかたちに舞台をはしりまわり、わるいものを踏みしずめる。物語性はなく郷土に因んだ祝言的な謡、足拍子を踏んで大地を踏みしめ悪霊を鎮めるなどの所作で新年安穏と繁栄を祈る。

大地踏を務める子供は男児と決まっているが上座は男装、下座は女装となっており謡いと所作も上座、下座によって多少異なるところがある。詞章を唱え踊る健気なかわいい姿に感銘をうける。

「三番叟」王祇祭・春日神社・王祇会館提供

「所仏則翁」王祇祭・春日神社・王祇会館提供

その後上座・下座両座がそれぞれ当屋で、5番立の能と狂言が夜を徹して行われる。そのなかで、午後10時頃下座から暁の使者が上座当屋に上がり王祇様に拝礼する。上座の当屋頭人、王祇守と提灯持ち、地謡が待ち受けている。「首尾ようおつとめなされ、おめでとう存ずる」と祝辞を述べ、下座では支障なく神事が行われている旨を伝え、「明日のご神事肝要にござる。おはよう御宮へお上りなされませいと申し越します」と暁の使者が口上をのべ、その後舞台では小宴饗応がはじまる。大変緊張しながら楽屋や周囲にも気を配る使者は大役である。早朝両座は演能が終わり春日神社に向かうが、下座は神社下の神職遠藤家へ立ち寄り、そこへ上座から下座へ七度半の使者が遣わされる。「昨晩は御念の入りたるお使いくだされありがとう存ずる。」と礼を述べ、「今日の御神事肝要にござる。時分ようございます。おはようお上り下されいと申し越します。」と再度口上を述べる。これが下座と上座使者との間で七度くりかえされ、最後に「おはようお上り」と言い捨てて督促することから、七度半の使者と呼ばれる。そして王祇様が春日神社に戻られる宮上がりのため、翌早朝神社向かいの「遊びの庭」で上座下座が合流する。両座の王祇様を早く社殿に戻そうと競い合って神社の石段を駆け上り、神社の王祇柱に王祇様を立てる「朝尋常」という神事が行われる。尋常とは激しく競い合うことで神を喜ばせる神事である。王祇様は上座下座両座で夜通し能を楽しまれて神社に戻られた王祇様に神事を行い、能・尋常をお見せしてお楽しみいただく。脇能、そして両座の稚児が交互に大地を踏み、古式を伝える能・狂言が演じられる。両座各二名舞台上方にある棚に上り、王祇様を梁に乗せる速さを競う棚上り尋常。その後、神事そして酒宴、王祇祭をしめくくる餅きりと布剥ぎという神事が行われる。王祇祭は歴史と伝統がなせる奥深く緩急巧みにかつ見事に構成されたお祭り、老若男女地域一帯となったお祭りである。2日にわたって黒川能が演能される。四季の生活に祭りと能楽が融合し大地にねざしたお祭りである。

平成25年10月伊勢神宮式年遷宮奉祝参拝と黒川能鑑賞の旅をした。20年に一度の式年遷宮に当たり、外宮内宮を参拝して、18日午後1時から厳かな内宮参集殿能楽堂で下座能「三輪」狂言「蟹山伏」続いて上座の能「大蛇」が奉納された。伊勢神宮一帯の荘厳な雰囲気につつまれ、式年遷宮の奉納能は神々しさがまして輝き感慨深くした。その夜亀山に宿泊、タイミングよく、黒川能の京都公演、和歌山公演が日本経済新聞文化欄「文化往

来」に掲載されたことは嬉しかった。19日上座は開館10周年記念特別公演として40年ぶりに京都市の金剛能楽堂で「道成寺」を上演し、下座は20年ぶりに和歌山県日高川町道成寺で「鐘巻」を上演した。上座下座同じ日程のため、私たちは和歌山道成寺へ向かう。道成寺境内には既に音響や照明が据え付けられた特設舞台が設けられていた。あいにくの雨で急遽近くの中学校の体育館に会場を移すことになった。

大きな体育館であったが、すぐに満席となり関心の高さがうかがわれた。安珍清姫伝説を題材にした道成寺ゆかりの演目「鐘巻」を演能、能「道成寺」は「鐘巻」の改作とされる。黒川能は能楽5流の道成寺に比べて「寺男役が寝入ってしまう場面がありユーモラスといわれている。舞台の大きさが変わってもすぐに対応できることに感心した。時空をこえ伝統の能が郷土に受け継がれていることを誇りとしたい。